

ポスト・ビザンツ期の現代ギリシャ語文法書と辞書

—複合前置詞の記述—

橘 孝 司

0. 序論

現代ギリシャ語の特徴を古代ギリシャ語と比較した場合、その顕著な相違の一つとして、「～の上」「～の下」といった空間概念がいわゆる複合前置詞によって表現される、という点を挙げる事が出来る。複合前置詞とは、各空間概念を示す副詞が前置詞(*σε* ないし *από*)と共起してまとまった意味統語的単位を形成するものである。例えば

Τάραχει ένα βιβλίο πάνω στο τραπέξι. 「テーブルの上に本がある」

Μια γάτα κάθεται κάτω από την καρέκλα. 「椅子の下に猫が座っている」

といった文において、*πάνω*, *κάτω* は具体的な空間概念の表現を担う副詞であり、これに *σ* (*σε* の異形態)、*από* という前置詞が結びつくことで、「テーブル」「椅子」を基準点としてその「上」「下」という空間の定位がなされている。複合前置詞においてどの空間副詞が *σε* と *από* いずれの前置詞と結びつき、あるいはこれらが「接近」「分離」「通過」といった移動の概念と組み合わさった場合、その結びつきにどう影響するのかという問題について、筆者はこれまで橘(1991)、Tachibana(1994a)などで論じてきた。また、複合前置詞の通時的発展については、中世後期(12世紀から15世紀)の民衆語文法の中で辿ることが出来るが、その概略は Tachibana(1994b)に示されている。

本稿では、現代語に特徴的なこの形式が、ポスト・ビザンツ期から現れ始める現代ギリシャ語の文法書と辞書においてどのように記述されているのか、その記述はどう発展(或いは退行)していくのか、を調査する。これにより、複合前置詞が文法記述に携わる人達の注意をどの程度惹き、現代口語の形態として記述するに足る対象であると認められていたのか、という点を明らかにすることが目的である。具体的には、16世紀前半から18世紀初頭にかけての代表的な文法書・辞書五編を調査対象として取り上げる¹。これらを成立・刊行年代の順に掲げると以下の通りであり、本稿でもこの順に論じていく。

ニコラオス・ソフィアノスの文法(16世紀前半成立)

ジロラモ・ジェルmano『イタリア語ギリシャ語辞典』(1622年ローマ刊)

シモン・ポルティウス『俗ギリシャ語文法』(1638年パリ刊)

シャルル・デュ・カンジュ『中世後期ギリシャ語作家辞典』(1688年リヨン刊)

アレッシオ・ダ・ソマヴェラ『俗ギリシャ語イタリア語辞典』(1709年パリ刊)

1. ニコラオス・ソフィアノスの文法²

ケルキラ島出身のソフィアノスは、16世紀に写字生・出版者としてベネチアで活躍した。彼の文法はポスト・ビザンツ期の口語ギリシャ語文法書の最初に位置するものとされている。出版されたのは後代の1870年になってであるが、枢機卿ジャン・ド・ロレーヌ Jean de Lorraine (†1550)への献辞が残っており、この年代以前の成立と考えられる。その献辞によると(p.34)、彼の文法は三部に分かれ、第一部で名詞・動詞・不変化詞、第二部で正書法、最終部で統語論を取り扱うことになっている。このうち第一部が出来上がったので献呈するが、残りの二部も近く完成する。また、現代ギリシャ語の辞書の編纂も計画している、と彼は書いている。しかし、第二・三部と辞書がその後どうなったのかは不明で、第一部のみが写本の形で残されている。

彼の文法は、伝統的な文法記述のスタイルにそっている。すなわち、音韻のリストに始まり、形態の説明を品詞ごとに進めていく。我々の興味の対象は、「前置詞について」(p.80)と「副詞について」(pp.80-83)の二つの章に見られる。

まず、「前置詞について」では、「前置詞はつねにあらゆる品詞の前に置かれる不変化の品詞である³」とされ、単音節の前置詞六つ、二音節の前置詞十一が列挙される。このうちに、複合前置詞を形成する *εις, από* などが含まれている。

続く「副詞について」の章では、「副詞は動詞よりも前或いは後ろに置かれる不変化の品詞である」と述べ、形態には単純形と複合形があった後で、意味的観点(時、質、量など)から分類された副詞の一覧を掲げている。本稿の課題の対象となるのは場所(*τοπικά*)の項目に収められた語群である。それらを空間概念別に分類しなおすと、次のようになる⁴。

「上方」 *άνω, απάνω*

「下方」 *κάτω*

「前方」 *ομπρός, έμπροσθεν*

「後方」 *οπίσω, όπισθεν*

「内部」 *έσω, απέσω, μέσα*

「外部」 *έξω, παρέξω*

「近方」 *σιμά, κοντά, πλησίον*

「遠方」 *μακράν*

「対向」 *ανάντια, ενώπιον, αντικρύ*

形態という点では、複合前置詞を形成する副詞がほとんど挙げられているが、幾つかの空間概念が漏れている(「周辺」「中間」)。しかしそれ以上に問題なのは、複合前置詞の重要な特徴である副詞と前置詞の共起という点に触れられていないことである。前置詞と副詞を別の章に分けてそれぞれの一覧を掲げる、という記述法ではこの統語的特徴に言及し難

いのであろうか。もちろん、統語論に当てられた未完の第三部において論じられた可能性はある。また、「表現の広大な森が含まれる (quo dictionum ingens sylua includeretur⁵)」という彼の辞書が完成していれば、その豊かな文例の中でこの特徴が十分に記されていたのかも知れない。

これとは対照的に、次に見る17世紀の二つの文法書は、副詞ないし前置詞の章の中で各々の諸形態を挙げながら、同時にこの統語的特徴にも触れる、という記述の仕方を取っている。

2. ジョラモ・ジェルマノ『イタリア語ギリシャ語辞典』⁶

ジェルマノはシチリアの人で、イエズス会伝道師として22年間ヒオス島で活動した。『イタリア語ギリシャ語辞典』は1622年ローマで刊行されたもので、自分自身及び同僚の伝道活動の助けとして執筆した、とその序に述べられている。

辞書の冒頭には文法概説が付されているので、まずこちらから検討する。複合前置詞はその中の「前置詞と副詞」の章(pp.54-55)で扱われており、「幾つかの前置詞・副詞には別の前置詞が結合する」とされている。そこに挙げられた例を空間概念別に分類し直すと次のようになる。

「上方」 *απάνω εις τον ουρανόν* 「空の上で」

「下方」 *κάτω από την γην* 「大地の下で」

「前部」 *ομπρώς εις τα μάτια μου* 「私の目の前で」

「内部」 *μέσα εις τα λόγια* 「言葉において」

「外部」 *όξω από* 「～の外で」

「遠方」 *μακριά από* 「～から遠く」

「周辺」 *τριγύρον εις το* 「～の周辺で」

「対向」 *εναντίο εις εκείνον* 「彼の向かいで」

ソフィアノスの文法ほど多くの副詞の例が挙げられていないが、この点は本体の辞書の部で補うことが出来る。その他に不十分な点としては、幾つかの空間概念が欠けている(「後方」、「近方」)こと、幾つかの副詞+前置詞の結合パターンが現れていないこと(*απάνω από*, *μέσα από* など)が指摘できる。

本体の辞書の部では、文法概説の部よりも多くの形態上のバリエーションが記されている。例えば、*sopra*「上」に対しては *απάνω* と *άνω*、*fuora*「外」に対しては *όξω* と *έξω*、*auanti*, *inanti*「前」には *ομπρός*, *ομπροσθά*, *έμπροσθεν* が当てられている。また、文法概説では欠けていた空間概念も記述されている(*indietro*「後」*οπίσω*, *οξοπίσω*, *vicino*「近く」 *κοντά*)。しかし、基本的にはイタリア語の単語にギリシャ語の単語を引き当てただけなので、統語的な特徴は示されていない。その欠は、(包括的な取り扱いではないにせよ)冒頭の文法概説の部分に委ねられている、と見るべきであろう。

3. シモン・ポルティウス『俗ギリシャ語文法』⁷

ポルティウスはローマの生まれで、1615年からローマの Collegio Greco で学んだ。1638年に『俗ギリシャ語文法』をパリで刊行し、枢機卿リシュリユーに捧げている。これに先立つ1635年にはラテン語-ギリシャ語辞書も出版している。Pernot(1907:24-39)が論じるところによると、ポルティウスの辞書・文法書は前節で検討したジェルマノの『イタリア語ギリシャ語辞典』を模倣しており、ヒオス方言の特徴が混入しているのも、この模倣が原因であるとされている。

ジェルマノとは異なり、副詞と前置詞とは別の章で論じられている(第9章と第10章)。複合前置詞についての言及は前置詞の章の方が詳しい。

第10章「前置詞について」(pp.54-57)では、まず八つの前置詞の意味記述が簡単になされる。続いて、これとは逆のアプローチとして、ラテン語前置詞を掲げた後へその意味に対応するギリシャ語の前置詞句・副詞句を引き当てている。その際に統語構造にも言及している点が目を引く。例えば *apud* 「～の近くに」の項は、

apud *κοντά* または *σιμά*、場所の副詞、1,2,3人称代名詞と結合する際は 属格を支配する(*κοντά σου*「君の近くに」、*κοντά του*「彼の近くに」、*σιμά μου*「私のそばに」)。他の場合は対格形を要求し、前置詞 *εις* を介在させる(*κοντά εις τους παλαιούς*「古人の近くで」)。他方で冠詞が後続する場合、前置詞 *εις* は二重母音 *ει-* を失い、*σ* となって結合する(*κοντά στην πόρταν*「扉の近くに」、*σιμά στον κάμπον*「野原のそばで」)。

と記されている。このような統語構造の記述はジェルマノには見られなかった特長である。

さて、そこに現れる複合前置詞を空間概念別にまとめて掲げると、以下のようになる。

「上方」*είχεν απάνω εις το κεφάλι του ένα στεφάνι*「頭の上に冠を載せている」

「下方」*αποκάτω από τον ρήγα*「王の下で」⁸

「前部」*ομπροστά εις τον κόσμον*「人々の前で」、*ομπρώς εις τα μάτια μου*「私の目の前で」

「内部」*μέσα εις την καρδιαν μου*「私の心の中で」

「外部」*όξω από τοίτο έχω κάθε πράγμα*「その他に何でも有している」

「近方」*κοντά εις τους παλαιούς*「古人の近くで」、*κοντά στην πόρταν*「扉の近くで」、*σιμά στον κάμπον*「野原の近くで」

「遠方」*μακρά από τα μάτια μου*「私の目から遠くに」

「中間」*ανάμεσα εις τον λαόν*「民衆の間で」、*ανάμεσα εις τοίτο*「その間で」

「周辺」*τριγύρον εις την χώραν*「土地の周辺で」。

「対向」*εναντίον εις τον ουρανόν*「空に対して」

ジェルマノに言及されていた複合前置詞がすべて含まれているだけでなく、それ以外の

空間概念にも触れられている（「中間」「近方」）。さらに、ジェルマノが複合前置詞句単位で例を挙げていたのに対し、動詞・目的語を加えた文単位での例示が指向されている（「上方」「外部」）。

ペルノーによって、ジェルマノの模倣を強調されたポルティウスの文法であるが、このように個々の記述では改良と見られる部分もある。もう一度まとめてみるならば、複合前置詞の統合構造への言及、より多くの空間概念への言及、散発的ではあるが文単位での例示などが改良点として指摘できよう。

他方で、ジェルマノの場合同様、複合前置詞の幾つかのボタンに触れられていない（例えば、「上方」 *πάνω από*、「前部」 *ομπροστά από*、「内部」 *μέσα από* など）。

4. シャルル・デュ・カンジュ『中世後期ギリシャ語作家辞典』⁹

この高名なビザンツ学者による辞書は、同じく詳細な『中世後期ラテン語辞典』出版の十年後、すなわち1688年にリヨンで刊行された。冒頭にはポルティウスの『俗ギリシャ語文法』を再録している。

辞書であるから、複合前置詞のように統語部門にも関連する形式の体系的な記述は望めない。しかし引用が豊富なので、各副詞の記述の中に複合前置詞を含む例を見出すことはできる。それらを空間概念ごとにまとめると次のようになる。

「上方」 *πλέουσιν απάνω εις την θάλασσαν*¹⁰ 「海の上を航海する」

「下方」 *μενίσκει απουκάτον εις τον αέρα*¹¹ 「空の下（＝野外）に存する」

「前方」 *εμπρός εις το παρακλήσιον των Ιταλών το έδαφος έχει μάρμαρον λευκόν*

「イタリア人の附属礼拝堂の前に白大理石の床がある」

φέγγουν και ομπρός εις την αγίαν τράπεζαν κανδύλαις

「祭壇の前でも吊り燭台が輝いている」

「内部」 *μέσα εις το σπήλαιον, είναι ο τάφος* 「洞窟の中に墓がある」

εις τα όρη μέσα είναι καθίσματα ξ' 「山中に六つの座がある」

έναι μέσα εις τον δρόμον 「道中にある」

Σαν λέγουσιν το πόδη μας είναι εις τον τάφον μέσα 「言わば我々の足は墓の中にある」

「近方」 *εις την Ραιθού σιμά έχει μοναστήριον του Προδρόμου*

「ライトウのそばにプロドロモス僧院がある」

έρχεται μια γυναίκα, και έπερνα από τον ναόν, σιμά από τούτου το ξύλον

「一人の女が来て、神殿の近く、彼の木のそばを通る」

κοντά εις τον οίκον του Δαβίδ είναι η κοιλάδα του κλανθμώντος

「ダビデの館の近くに嘆きの谷がある」。

ほとんど文単位で引用がなされていることにより、副詞＋前置詞の結合パターンが明示され

ている点が長所である。但し、様々なパタンを体系的に記述するところまではいかない。また、中世語独自の語彙を対象としているので、副詞が古代語伝来の場合には(例えば「下方」*κάτω*)、そもそも項目として取り上げられていない。

5. アレッシオ・ダ・ソマヴェラ『俗ギリシャ語イタリア語辞典』¹²

カプチン派の神父でコンスタンチノーブルやスミルナで長年過ごした人。『俗ギリシャ語イタリア語辞典』は1709年パリで死後出版された。

デュ・カンジュ同様に辞書であるため、各語の統語構造の記述が体系的に見られるわけではない。ただし、収録語彙が多いため、副詞の様々な形態的バリエーションが示されている。例えば「周囲」表現の副詞としてジェルマノ、ポルティウス、デュ・カンジュは *τριγύρου* のみを掲げるのに対し、ソマヴェラは *ολόγυρα, ολογύρου, γύρου, τριγύρου* を挙げている。

さらに、各副詞の項目の下には豊富なイディオムの例が掲載されている。しかしながら、複合前置詞の記述、という点では上で見てきた文法書・辞書以上に多くの例が見られる、というわけではない。

「上方」 *απάνω εις εμένα* 「私の上に」 *απάνω στο σπίτι* 「家の上に」
απάνω απ' αυτόν 「彼の上を通過して」

「下方」 *κάτω στη γην* 「下の大地で」 *κάτω από την γην* 「大地の下で」
από κάτω από την γην 「大地の下で」¹³

「前方」 *ομπρός εις τα φουσσάτα* 「軍隊の前で」

「内部」 *μέσα εις εμένα* 「私の中で」 *μέσα εις τοίτο* 「その中で」

「外部」 *έξω από τοίτο, όξω από τοίτο* 「その外に」
απ'όξω εις το εξωτερικόν 「外面では」

「近方」 *κοντά στο σπίτι* 「家の近くで」

「対向」 *αντίκρυ στο σπίτι* 「家の向かいで」

他方で、記述上の長所として次の二点が上げられる。まず、複合前置詞中の副詞の後では代名詞非強勢形が前置詞句と交替して現れるという点は、ポルティウスにも指摘されていたが、ソマヴェラでは、実例により示されている。

απάνω μου, σου, του, απάνω εις εμένα, εις εσένα, εις αυτόν 「私、君、彼の上で」

第二に、同一の副詞に対し二つの前置詞が結合する際の意味的差異に言及している場合がある。

κάτω στη γην *da basso in terra, giù in terra* 「下の大地で」

κάτω από την γην *sotto terra, sotto la terra* 「大地の下で」

前者では副詞と前置詞句が同一の位置、すなわち、(明示されていない)或る基準点より「下」

にある「大地」を指示している。これに対して後者では、「大地」を基準として、それより「下」の或る位置が示されている。この正当な意味的差異の指摘は¹⁴、他の辞書・文法書では見られなかったものである。ただ残念なことに、このように句レベルのペアを対照して意味的差異を記述しているのはこの場合のみであった。

6. 結論

以上考察したポスト・ビザンツ期の五編の文法書・辞書のいずれにも複合前置詞が多少とも言及されており、その取り扱いは少しずつ前進をしている、と言えそうである。

ソフィアノスの文法は、今日残された部分から判断するしかないが、複合前置詞の構成要素である空間副詞の形態面については様々なバリエーションを挙げていたものの、前置詞との結合については触れていない。

ジェルマノ『イタリア語ギリシャ語辞典』になって初めて副詞＋前置詞の結合形が記述されるようになる。しかしながら、幾つかの空間概念が言及されておらず、幾つかの副詞＋前置詞パターンも記述から漏れている。

ポルティウス『俗ギリシャ語文法』では、ジェルマノの模倣と言われながらも、取り上げられる複合前置詞の種類も増し、句単位のみならず文単位での引用も見られる。また、副詞の結合相手として前置詞句と代名詞非強勢形の交替が述べられている。

デュ・カンジュ『中世後期ギリシャ語作家辞典』とソマヴェラ『俗ギリシャ語イタリア語辞典』は辞書という形式ゆえに、体系的な記述という点では上記の三文法書と同列には論じられない。しかし、複合前置詞の記述という面で評価できるのは、前者では、文単位での引用により、副詞＋前置詞の結合パターンが明示されている点であろう。後者では、副詞の形態的バリエーションが豊富に採録されている点、副詞と結合する前置詞句・代名詞非強勢形刊の交替に触れている点、前置詞の交替によって生み出される意味的差異に言及している場合がある点などを挙げる事が出来る。

註

¹⁴ 16-18世紀の文法書・辞書全般については Legrand(1874:5-31), Pernot(1907:5-18) に詳しい。前者は12文法書、後者は29文法書・辞書を記述している。他に簡潔な記述として Knös(1962:293-295, 652-655) や Beck(1971:16-17)、最近のものとしては Irmischer(1993) がある。ポスト・ビザンツ期の辞書・文法書がギリシャ語の史的研究に対して有する価値について、現代の研究者は概ね肯定的に捉えている。例えば、Knös(1962:354) は、これらの辞書・文法書の大部分は、当時の口語の状態を示す点で、ある程度の価値を未だ保っている、とする。Browning(1983:93) も、ソフィアノス、ジェルマノ、ポルティウスの文法書・辞書は、擬古体の説明をも含み、ソフィアノスは自身の方言（ケルキラ島）の特徴が混入する

場合があるけれども、共通口語の一貫した説明を与えてくれる(特にソフィアノス)、と考
えている。さらに、Joseph(1990:6)は、上の Browning の一節を引用した後、これらの辞
書・文法書を評価して、つねに統語研究に有用であるわけではないが、いくつかのポイン
トについて決定的な確証を与えることもある、とやや慎重に述べている。

² Νικόλαος Σοφιανός, *Γραμματικής εισαγωγής βιβλίου πρώτου*. 使用テキストは
Legrand(1874²) (= Παπαδόπουλος, 1977)。

³ 「あらゆる品詞の前」 *ἴσταις ἀρχαῖς ὀλωνῶν των μερῶν του λόγου* というのは名詞・
代名詞の前 (=いわゆる前置詞) と動詞の前 (=動詞接頭辞) の両方の場合が考えられて
いるからである。この点は同箇所直後の例から確認できる。

⁴ 本稿では「或る基準点の上」「或る基準点の下」といった意味概念を「上方」「下方」等で
示すことにする。これらは Joseph&Philippaki-Warburton(1987:141-146)に使用されてい
る同様の概念 Superior, Inferior 等を試訳したものである。各概念の作業定義としては Svor-
ou(1994:235-243)参照。

⁵ 上記ド・ロレーヌへの献辞中の表現(p.34)。

⁶ Girolamo Germano, *Vocabolario italiano et greco, nel quale si contiene come le voci
Italiane si dicano in Greco volgare*. 使用テキストは Pernot(1907)。

⁷ Simon Portius, *Γραμματική της ρωμαϊκής γλώσσας, Grammatica linguae graecae
vulgaris*. 使用テキストは Meyer(1889)。

⁸ この例では *ἀπό* が用いられているが、リシュリュエへの献辞中では *εις* が使われている
(*εὐρίσκειται ἀποκάτω εις την σκέπην τέτοιου μεγάλου ἀρχόντου* 「そのような偉大
な指導者の下で」 p.2)。

⁹ Du Cange, Ch. (1688:rpt.1958) *Glossarium ad scriptores mediae et infimae Graecitatis*.

¹⁰ ドュ・カンジュはこの例を J.Meursius *Glossarium graecobarbarum, in quo praeter
vocabula quinque millia quadrigenta...* Lugduni Batavorum, 1614² から引いている。

¹¹ この例も Meursius *Glossarium graecobarbarum* より引用。

¹² Da Somavera, A. (1719) *Θησαυρός της ρωμαϊκής και της φραγκικής γλώσσας.
Tesoro della lingua greca volgare ed italiana*.

¹³ ここに見られる *ἀπό κάτω ἀπό* に対して、辞書の表紙には印刷所の所在地の目印とし
て *ἀπό κάτω στο σημάδι του μέγα Ιωάννη* 「大ヨアニスの印の下」と書かれており、*σ*
が用いられている。

¹⁴ 現代語におけるこの意味的差異の記述としては Tzermias(1969:235), Mirambel(1983:
186-7)など参照。

引用文献

- Beck, H.G. (1971) *Geschichte der byzantinischen Volksliteratur*. München: C. H. Beck.
- Browning, R. (1983²) *Medieval and Modern Greek Language*. Cambridge UP.
- Du Cange, Ch. (1688:rpt.1958) *Glossarium ad scriptores mediae et infimae Graecitatis*. Lyon.
- Irmscher, J. (1993) 'Η αρχή της νεοελληνικής γραμματικής.' In Παναγιωτάκης (1993) pp.100-105.
- Joseph, B.D. (1990) *Morphology and Universals in Syntactic Change : Evidence from Medieval and Modern Greek*. New York/London: Garland Publishing.
- Joseph, B.D. & Philippaki-Warbuton, I. (1987) *Modern Greek*. London: Croom Helm.
- Knös, B. (1962) *L'histoire de la littérature néo-grecque, la période jusqu'en 1821*. Göteborg/Uppsala: Almqvist & Wiksell.
- Legrand, E. (1874²) *Nicolas Sophianos, Grammaire du grec vulgaire et traduction en grec vulgaire du traité de Plutarque Sur l'Education des Enfants*. Athènes (= Παπαδόπουλος, 1977:169-291).
- Meyer, W. (1889) *Simon Portius, Grammatica linguae graecae vulgaris*. Paris: F. Vieweg.
- Mirambel, A. (1983) *Grammaire du grec moderne*. Paris: Klincksieck.
- Παναγιωτάκης, Ν.Μ. (ed.) (1993) *Αρχές της νεοελληνικής λογοτεχνίας (Πρακτικά του δευτέρου διεθνούς συνεδρίου «Neograeca Medii Aevi», Βενετία, 7-10 Νοεμβρίου 1991) 2 τομ. Βενετία : Ελληνικό Ινστιτούτο Βυζαντινών και Μεταβυζαντινών Σπουδών της Βενετίας.*
- Παπαδόπουλος, Θ. Χ. (1977) *Νικολάου Σοφιανού Γραμματική της κοινής των Ελλήνων γλώσσας*. Αθήνα : Κέδρος.
- Pernot, H. (1907) *Girolamo Germano, Grammaire et vocabulaire du grec vulgaire publiés d'après l' édition de 1622*. Paris.
- Da Somavera, A. (1719) *Θησαυρός της ρωμαϊκής και της φραγκικής γλώσσας. Tesoro della lingua greca volgare ed italiana*. Paris.
- Svorou, S. (1994) *The Grammar of Space*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 橘 孝司 (1991) 「現代ギリシャ語の空間指示表現と前置詞 一存在/運動/移動の動詞との結合例の分析一」 『ニダバ』 20, pp.58-71.
- Tachibana, T. (1994a) 'Spatial Expressions in Modern Greek.' *Studies in Greek Linguistics* (Proceedings of the 14th Annual Meeting of the Department of Linguistics, Aristotle University of Thessaloniki), pp.525-539.

- Tachibana, T. (1994b) 'Spatial Expressions in Byzantine Vernacular Greek.' *Themes in Greek Linguistics : Papers from the First International Conference on Greek Linguistics, Reading, September, 1993*. I. Philippaki-Warbuton, K. Nicolaidis & M. Sifianou (eds). John Benjamins, pp. 427-434.
- Tzermias, P. (1969) *Neugriechische Grammatik*. Bern/München: Francke.